

知里真志保は、オサラッペ川の原

名は、「オサルペツ (o-sar-pet 川尻・葦原・川)。川尻に葦原のある川の義」——と書

いたが、明治二十三年に調査した永田方正は、「サラは出すの義、此処茅なし」と、わざわざ注記している。オサラッペ川の川尻、すなわち石狩川に流入する所、石狩川との合流点の状況が、川名になったもので、地名解では、川尻(川口)の状態が重要なポイントとなる。

さて、写真①は、昨年(2019年)の十一月に近文大橋から、オサラッペ川の川口を撮影したもの。オサラッペ川は、

ノチウとオサラッペ川(上)

写真①



JR函館本線の鉄橋の下を通り、その手前のサイクリングロードの草苗橋の下を通って、そのすぐ先で石狩川に流入している。星が落ちて来

て、岩になったという伝説の岩「ノチウ (nociw 星)」は、石狩川の中にある。これが現在のオサラッペ川の川口だったことを物語っている。

明治二十一年九月、第二代北海道庁長官の永山武四郎の上川巡検に同行した『北海道毎日新聞』記者・野中掬泉は、一行の近文山および半山登頂の帰途、わざわざ丸木舟からおりて、このノチウを観察し、次のように記述した。

「(近文)山を下り、剗

舟に乗じて川を上り、嵐山の麓を過ぎ字オシヤラッペに至る。此処河畔密林の中、一大巖あり。アイヌ之れを隕星石と称して尊崇す。余之れを聞き、舟を止め、直

に(阿部宇之八)社長と共に岸に上り、舟子アイ

又を嚮導とし、荊棘を排して林中に入る。巨巖あり。林樹深き所に直立す。其高さ大約丈(約三・〇三)

余、就て之を見る。赤色にして白斑あり。其質近傍山岳及び河中にあるものと異ならず、唯砂州樹林の中に孤立し、其形状大に風致あるのみ。アイヌに隕石の由来を問ふも、唯口

碑に伝ふると答ふるのみ。是れ亦た神居古潭の類なるか。再び船を棹して上る。夕陽、面に映ずるや、又忽ち背を照す。以て石狩河流の曲折するを知るべし。……と、このノチウが陸続きにあり、「高さ大約丈余」の「一大巖」「巨巖」だったこと、また、当時の石狩川の蛇行の様子が簡潔に記されている。

明治三十三年生まれの荒井源次郎翁も、「ノチウまでは陸続きで、ここによくフキを取りに行った。オサラッペ川はこの岩の先で石狩川に合流して、ここでよく泳いだものだ」と教えて下さった。

次回に「巨巖」ノチウと、それを踏まえたオサラッペ川の地名解を述べたい。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

⑭

高橋 基

ツペ川の川尻(川口)の状況である。ところが、今から百五十二年前の安政四年(一八五七年)六月、丸木舟に乗った松浦武四郎は、神居古潭から石狩川を廻り、オサラッペ川の川口の状況を写真②のよう



写真②

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します